

# 文化課からのお知らせ

次回展示は… **企画展「光太夫が書いたロシア文字」**

11月11日(水)～3月14日(日)

光太夫が書いたロシア文字による墨書を中心に展示し、光太夫が日本に伝えたロシア語について紹介します。「ツル」や「ナンザンジュ」など、光太夫が書いた墨書は縁起が良い言葉が大半です。同様の墨書は全国各地に残されていますが、その来歴を辿っていくとそのほとんどが光太夫と交流のあった蘭学者の家か白子周辺の旧家に所蔵されていたものであることがわかってきました。

\*大黒屋光太夫記念館は、鈴鹿市文化振興部文化課が所管する資料館です\*

以下の所管資料館も併せて是非ご来館ください。

- ・伊勢型紙資料館 (鈴鹿市白子本町 21-30 Tel059-368-0240)
- ・庄野宿資料館 (鈴鹿市庄野町 21-8 Tel059-370-2555)
- ・稲生民俗資料館 (鈴鹿市稲生西 2-24-28 Tel059-386-4198)

各館のパンフレットは受付で配布しています。

## 本の紹介

桂川甫周についてさらにお知りになりたい方には以下の本をお勧めします。

- ①今泉みね『名ごりの夢 蘭医桂川家に生れて』平凡社(東洋文庫)1962年  
桂川家の娘・みねが晩年に語った回想録です。江戸時代の雰囲気手に取るようになります
- ②戸沢行夫『オランダ流御典医桂川家の世界 江戸芸苑の気運』築地書館 1994年  
甫周の弟・森島中良を中心に、江戸文化の中で桂川家の役割がわかる1冊です。
- ③C.P. ツェンバリー著、高橋文訳『江戸参府随記』平凡社(東洋文庫)1994年  
甫周の存在をヨーロッパに紹介した本のひとつです。当時の日本の様子もよくわかります。

## 編集後記

今回の特別展は、桂川甫周を取り上げました。大黒屋光太夫のように異国へ漂流した日本人は実は数多く存在しました。大黒屋光太夫は中でも、もっとも有名な漂流者の一人です。その理由には、西洋から帰還したはじめての日本人だったことがまず挙げられますが、「漂民御覧之記」「北槎聞略」という二つの漂流記が残されたことも大きな要因であると思います。「漂民御覧之記」は、多くの人びとに読まれることによって光太夫の存在を有名にし、「北槎聞略」は、光太夫の経験を詳細に今に伝えてくれています。この二つの本の編者である桂川甫周との出会いが、光太夫に他の漂流者とは違った存在感を与えたのだと思います。

光太夫は、多くの人に支えられて日本に帰国しました。そして、帰国後も桂川甫周をはじめとする人びとの中に迎えられる。今回の特別展では、光太夫と江戸の人びとの交流についても感じ取っていただけたら幸いです。



題字：大黒屋光太夫書「ツル」の署名より。



編集・発行：鈴鹿市文化振興部 文化課 Tel059-382-9031

大黒屋光太夫記念館 Tel & FAX 059-385-3797

URL: <http://www.edu.city.suzuka.mie.jp/kodayu>

# 第5回特別展 西洋に知られた日本人

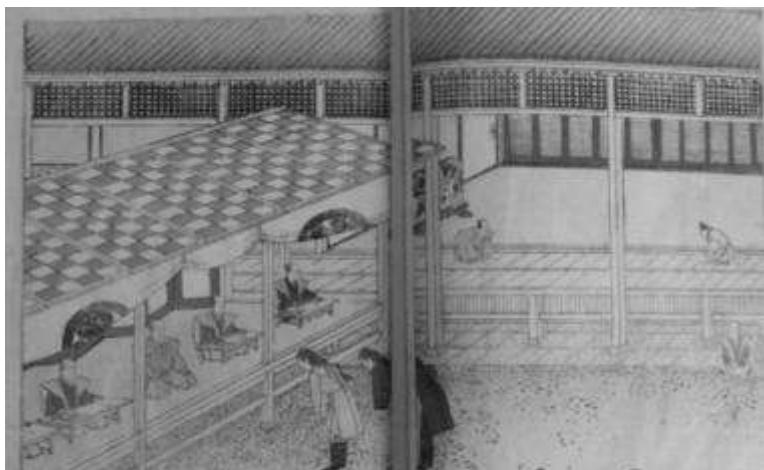
## ～甫周と光太夫～

大黒屋光太夫は、帰国後、江戸城で将軍・徳川家斉の上覧を受け、さまざまな質問に答えました。そのなかに「彼地にて、日本の事ぞんじ居候哉」という質問がありました。光太夫は、「日本人にては、桂川甫周様・中川淳庵様と申す御方の御名をば、何れも存居申候」と答えています。

蘭学者・桂川甫周の名は、交流のあったオランダ商館の関係者などを通じて、海を越え、西洋に広まっていたのです。将軍はこれを大いに喜び、大黒屋光太夫の経験を聞き取り書物としてまとめるよう桂川甫周に命じたといわれています。

一方、大黒屋光太夫は、十年間にわたるロシア滞在中で、さまざまな人びとと巡り合いました。たとえば、カムチャッカで出会ったレセップスは、フランスに帰国後の『旅行日録』を著し、ヨーロッパでベストセラーになりました。そこには、光太夫一行についても詳しく記されています。また、ペテルブルグではロシアの高官たちの間で話題となり、一躍時の人となります。光太夫の名も、また西洋に広まっていたのです。

桂川甫周と大黒屋光太夫。西洋に知られたふたりの邂逅は、「漂民御覧之記」・「北槎聞略」というふたつの書物を生み出し、ふたりの名を不動のものとししました。今回の特別展では、桂川甫周没後 200 年を記念して、「西洋に知られた日本人-甫周と光太夫-」と題し、桂川甫周を中心に光太夫との関わりについても展示しています。



←石井研堂『日本漂流譚』 1892  
学齢社 鈴鹿市

光太夫と磯吉が江戸城の吹上上覧所において将軍家斉に拝謁した時の図です。御簾の中に将軍がおり、光太夫の正面に桂川甫周らが座しています。

## 桂川甫周について

桂川家は、初代甫筑（1661-1747）より代々幕府に仕えた奥御医師の家でした。奥医師は、官医、御典医などとも呼ばれ、将軍やその家族、幕府の高官などの診察を行うのがその役目でした。多くの場合「法眼」に叙せられ、供廻りを従えて駕籠で江戸城に登城することが許されていました。桂川家は、その中でもオランダ流の外科医の家系として特殊な地位を占めた家でした。

その四代目を継いだのが、桂川甫周国瑞（1751/54-1809）です。甫周は、桂川家の当主としてオランダ流の医学をおさめる一方で、世界地理・科学・言語などにも深い関心を抱き、隆盛期を迎えた蘭学の世界で中心的な存在となっていました。

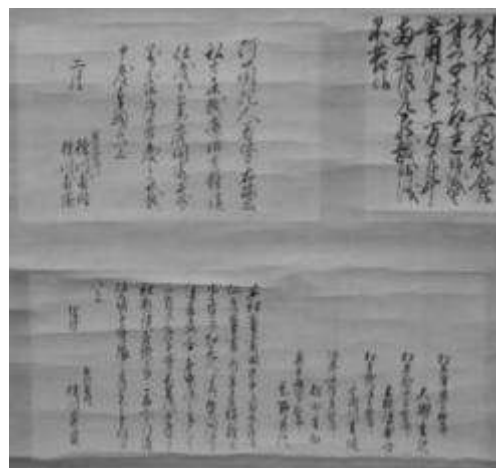
蘭学とは、オランダから輸入された洋書を通じて、西洋のあらゆるものを研究する学問です。医学はもちろん、化学・薬学・天文・物理などの自然科学や、砲術などの軍事技術、さらに歴史・地理・言語などの人文科学もその研究対象とされました。

甫周は、父国訓（1730-1783）や前野良沢（1723-1803）から蘭学を学び、蘭学の勃興を促すこととなった『解体新書』の翻訳作業に当初から若くして参加するなど、早くからその才能を発揮しました。明和6年（1769）には奥御医師となり、寛政6年（1794）に幕府の医学館教授となりました。安永5年（1776）には、江戸へ来たオランダ商館付医師ツンベリーに師事してリンネの植物標本法や医学を学びました。日本で初めて顕微鏡を医学に用いたのも甫周です。そして、医師として『和蘭薬撰』『海上備要方』『和蘭袖珍方』など医学書の翻訳に携わり、弟子の宇田川玄隨にゴルテルの内科書を託して『西説内科撰要』を訳させたりもしました。

また、世界地理に強い関心を示した甫周は、『新製万国地球図説』『地球全図』などを翻訳し、寛政4年（1792）にロシアから大黒屋光太夫が帰国したという報せを受けると、ヒュプネルの地理学書（『ゼオガラヒ』）のオランダ語版から『魯西亜誌』を訳出します。そして、光太夫が江戸に送られ、江戸城吹上上覧所で将軍・家斉の上覧を受けた際には、その場に列席して「漂民御覧之記」を著しました。この「漂民御覧之記」は、またたくまに各地に広まり、大黒屋光太夫と桂川甫周の名を日本中に知らしめることになりました。

さらに、甫周は、大黒屋光太夫からロシア事情について詳しい聞き取りを行い、寛政6年に「北槎聞略」を上梓します。光太夫の体験と甫周の分析が生み出したこの地理書は、江戸時代のロシア研究の最高峰と言われ、甫周の代表作ともなりました。甫周と光太夫の出会いによって生まれた「漂民御覧之記」「北槎聞略」のふたつの書物は、その後の漂流者の聞き取りや海外研究に大きな影響を与え、大槻玄沢「環海異聞」などに引き継がれていきます。

日本の医学の発展だけでなく、甫周の科学的な視線は、日本の地理学や北方研究の発展を導くことになりました。そして、甫周に生きた北方情報を提供した大黒屋光太夫の存在は、甫周の業績とともに語り継がれることとなります。



阿蘭陀人对談願 個人

寛政6年春のオランダ人との対談について、桂川甫周が幕府に願い出た願書、大槻玄沢・森嶋中良・宇田川玄隨・杉田玄白・前野良沢を対談に同席させたいとする願書、および幕府からの返書です。代々オランダ人との対談を許されていた桂川甫周に同行するという名目で杉田玄白ら高名な蘭学者も対談が許可されました。



鈴木常八 人頭解剖模型 1794

東京大学医学部

オランダ商館長から桂川甫周に蠟製の人頭解剖模型が贈られたのは寛政6年5月のことです。その年の10月、甫周は、職人・鈴木常八に依頼して、人頭解剖模型の模作を作らせました。ヒノキの寄木造りで作られたこの模型は、とても精巧につくられており、オリジナルの行方が分からない今、江戸の蘭学者を驚かせた模型の姿を今に伝えてくれています。



地球儀 稲垣定穀旧蔵

津市教育委員会

甫周は、様々な地図を比較検討して地球の姿を作り上げました。大陸と地続きと考えられることが多かった樺太は島として認識されていますが、ニューギニアとオーストラリアが地続きであるなど修正が必要な箇所も見られます。



桂川甫周「北槎聞略」 1794 成立 鈴鹿市

桂川甫周が幕府の命により編纂したロシアに関する地誌書です。大黒屋光太夫から聞き取りを行い、それを『ゼオガラヒ』などの洋書と比較して分析しています。